

平成 28 年度卒業研究発表会要旨集の巻頭にあって

小林 沙羅 (筑波大学 生物学類 4 年)

4 年前の入学式。新しい環境への希望と不安でいっぱいだった胸中が、つい昨日のことにように思い出されます。田舎育ちだった私は、つくばの豊かな自然に少しほっとしたものです。たくさんの動植物に触れながら、同級生と共に生物学を学びました。そうするうちあっという間に大学生活の 1 年が終わりを迎え、いざ足を運んだ卒研発表会でしたが、ほとんど理解できなかったのが正直なところ。自分の知識の少なさ、また生物学の深さ、広さを痛感させられました。

3 年生になると、今度は運営側として卒研発表会に臨むことになりました。先輩方に心おきなく一年の集大成を披露してもらおうと、スタッフ代表として準備、運営に奔走しました。慰労会で卒業生のほっとした顔を見て、自分もやっと肩の力が抜けたのを覚えています。たくさんの同期や後輩の皆さんの協力のおかげで、先輩方の晴れの舞台を無事終えることができました。

4 年生になり、いよいよ自分が発表する立場となりました。配属する研究室が決まり、自分のテーマに打ち込んできましたが、自分の知識の乏しさを突きつけられる毎日です。皆で同じ授業を受けていた頃とは違って、互いに顔を合わせる機会も少なくなりましたが、それぞれが自分の研究に懸命に取り組んできたことと思います。発表会ではその努力の証と共に、一回り成長した卒業生の姿をご覧いただけることでしょう。

後輩の皆さんにとって、この発表会は自分の将来について考えるよい機会です。研究内容や発表の姿勢を見て、1 年後、2 年後の自分の理想像を想像してみてください。また、どんな些細なことでも積極的に質問してみてください。小さなことにも疑問を持つという姿勢は皆さんの卒業研究にもきっと役に立つと思います。

最後になりますが、忙しい中卒研発表会の準備・運営をしてくださった 2、3 年生の皆さん、本当にありがとうございました。そして、4 年間授業や実験、卒業研究等を通してご指導いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

ある日旅行からつくばに戻ってくると、「帰ってきたな」と思っている自分に気がつきました。4 年という歳月のうちにすっかりここに馴染んでいたようです。振り返れば、豊かな自然のうつろいを肌で感じながら月日を重ねることができました。そのように過ごした 4 年間だからこそ、つくばがもう一つのふるさとのように感じられるのでしょうか。教科書からだけでなく、周囲の生き物からも生物学を学べたことをとても幸せに思います。

Communicated by Kenji Miura, Received November 15th, 2016.